

# 歴史

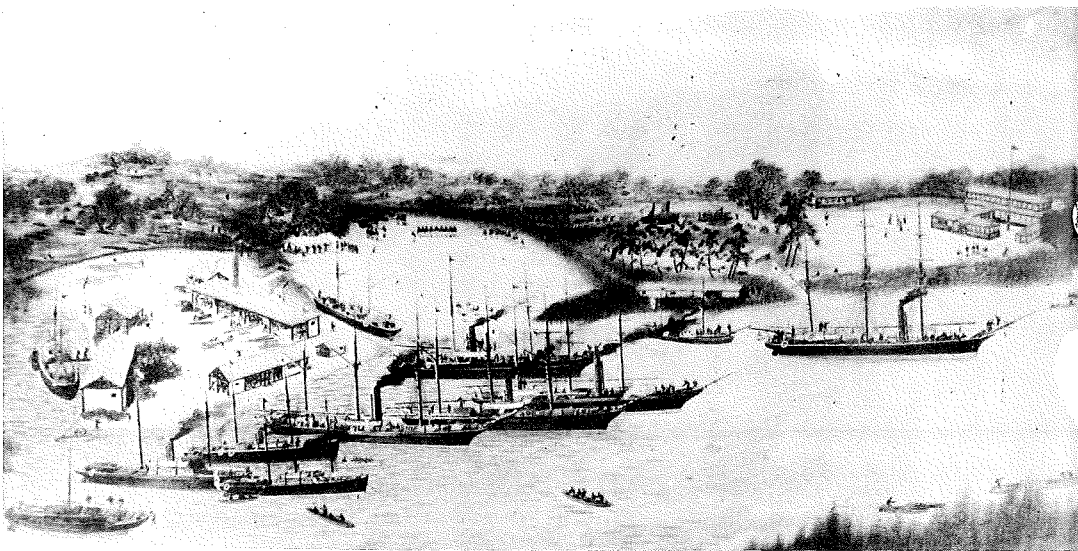
有明海沿岸では不幸にも満潮時と強風時が重なり、約一四分の氣象潮が加わったため、久保田、大授、西川副、南川副の各干拓堤防は各所で決壊、本町の筑後川沿岸の地区では殆ど床上浸水、新地掘の堤防を切って排水するほどの被害を出した。本町関係の罹災世帯数一〇二戸、罹災人員五四六人、県では仮設住宅二戸、応急家屋補修九戸を建て救済に当たった。

災害には氣象災害などの天災と地震のような地異がある。佐賀県は地震が少なくなく、本町でも記録に残るような被害は残っていないが、昭和二十一年十二月二十二日に起こった北海道大地震は、佐賀でも震度三を示し、各地で瓦が落ちたり、煙突が倒れたりしている。当時の『佐賀新聞』に「佐賀郡東川副村諸富署管内、倉庫倒壊一戸、塀倒壊五カ所」とみえる。

災害にもなつて疫病がでたり、飢饉になつたりする人災も多い。火災などは人災に入るが、諸富町では今までそれほどの大火は発生していない。明治以後の主な火災は別表のようなものである。

年 月 日	火災の場所と内容
明治二十七年一月二十一日	諸富津東小路小森清八家楼上より出火、小島屋、迎屋ら一四戸全焼
同二十七年三月二十三日	新北村浮盆の空家より出火一九戸焼失
大正五年十一月十五日	諸富字中小路、米穀商徳永方から出火五戸全焼
同十五年六月二十六日	東川副村大黨浅場、田中方出火、住家三、倉庫二焼失
昭和十三年二月九日	新北小学校第一校舎より出火、第二、第三校舎を全焼
同十五年一月二十六日	新北村寺井津に出火、六棟全焼
同二十年八月六日	アメリカ空軍機の爆撃で、東川副村九七戸、新北村一〇五戸全焼
同四十九年十二月二十三日	諸富津津田良助宅外二棟全焼
同五十四年四月二十七日	徳富九州電力佐賀営業所所有変電所全焼
同五十四年三月二十五日	大堂字陣内成富時雄・松尾徳一宅ほか五棟焼失
同五十五年十二月十四日	為重の中島義男宅全焼

〔佐賀県災異誌〕による



三重津の佐賀藩海軍伝習所絵図

## 原始・古代

### 一 概 説

佐賀県に人間が住むようになったのは、今から約三万年ほど前のことと思われるが、まだはっきりしたことはわからない。

当時はいまより気候もずっと暖かく、陸地は原始林におおわれて、鹿や猪や猿が群をなし、魚類や貝類も多く繁殖していた。また海岸線もいまより二、三〇キロ高く、現在の山麓部近くまで海が入っていたと思われる。

そのころの人たちの生活は、粗末な石器を用い、土器をつくることをまだ知らない、いたって原始的なもので、大陸地方では旧石器時代とよばれる人たちと、ほとんど変わらない生活をしていただものと思われる。この時代のことを前縄文文化時代とか無土器文化時代と呼んでいる。

佐賀県でもそれに類する遺跡が、昭和三十三年（一九五八）、鬼ヶ鼻山の北麓三年山から多久市の茶園原にかけて発見され、大量の石器が出土し、九州における旧石器文化の存在が明らかになった。

鎌が発見されていることでもわかる。農業は収穫がある程度確実であり、危険性もないので、やがて一年の生計は農業によってたてられるようになった。

三世紀の中頃になると、地方に豪族があらわれるようになり、その支配者は大きな高塚古墳をつくるようになる。この時代のことを古墳時代ともいうが、後期になると、いくらか歴史的文献も残っている。この時代は一部の権力者を除くと、一般の人たちは弥生文化の段階にあり、特にはっきりと変わる特色はない。しかし社会的には、弥生時代に小さな部落国家と思われるものが方々にあつたが、この時代になると、小さな国は大きな国に併合されて、しだいにまとまった国家へと発展していった。歴史的には邪馬台国の論争がなされる時代である。この時代の遺跡は佐賀の山麓に多くの古墳



多久三年山出土の石器類

前縄文時代より大部おくれ、まがりなりにも土器をつくり、磨製の石器がつくられたすと新石器時代がはじまる。これを縄文文化時代といって、西暦元前後のころまで、七、八〇〇年もつづいた。しかしその長年月の割に文化の進展が見あたらず、わずかに土器が精巧化していく程度である。当時の原始人といえども生活を便利にし、すぐれたものを求める心には変わりないが、知識が低い上に、道具そのものが粗末な石器では、それを使つて手に入れるものは限られており、生活にゆとりがなかったと思われる。けれども、後の時代に発達をとげる種々の文化の源は、すでにこの時代からわずかにではあるが着実に芽ばえていた。

この時代の遺跡は佐賀平野の山麓部や西唐津の海底などから発見され、住居跡が相知町千束で発掘されている。縄文文化も終わりに近づく西暦紀元前二・三〇〇年前後より、急にこれまでとちがった特色ある文化があらわれ、弥生時代がはじまる。この時代は比較的短く、五、六〇〇年の期間と考えられている。この時代の文化の特色は、大陸から農耕と金属の文化が伝来し、いままで自然採集の毎日をおくっていた人たちが、低地に住みつき、農業を行い、家畜を飼い、金属をつかつて建築や他の道具などもつくるようになった。しかし、まだ全般的に金属がつかわれたのではなく、縄文時代からの石器をうけついでもので、金石併用時代とも呼んでいる。

佐賀県で稲が栽培された証拠は、唐津市の菜畑遺跡から炭化米が発掘されて確認された。この遺跡は縄文時代の晩期のものといわれている。また各地の遺跡から木製の農具のほか、稲穂をつみとつたと思われる石包丁や石

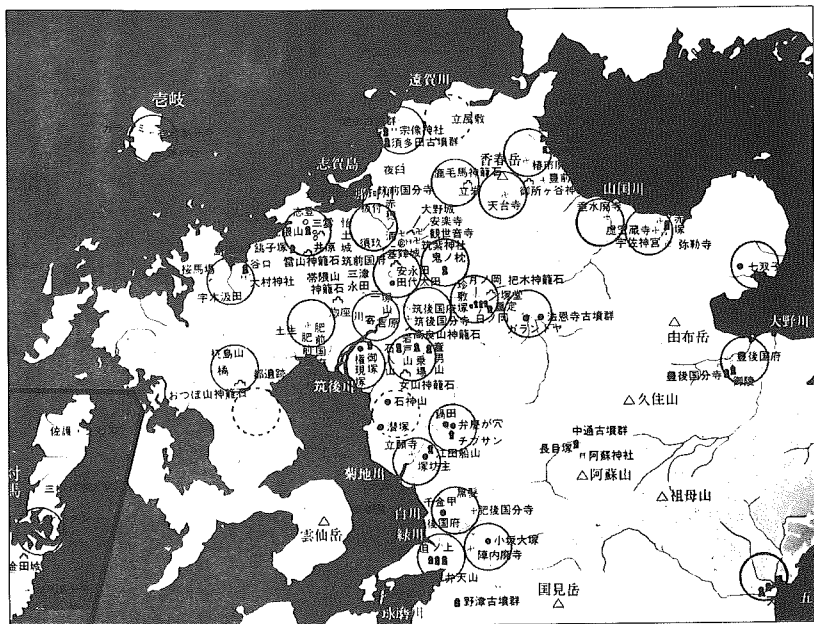


図1 「漢書」・「後漢書」に現れる北九州の「クニグニ」  
 (『鳥栖銅鐸と2000年前の西日本』所収)

を残している。

諸富町はこのころようやく有明海の自然陸化などによって、歴史の舞台にあらわれるようになる。

古代は奈良時代と平安時代を包含している。奈良時代は、奈良盆地に大和政権が生まれ、ここを中心に日本全国が統一された。しかし国内の政治が本当にまとまるのは、六世紀末の推古天皇のころからで、大陸とも正式な交渉が行われ、聖徳太子の治世もあった。この時代は二〇〇年ばかりつづくが、前半一〇〇年を飛鳥時代と呼ぶ。

この時代は『日本書紀』や『肥前風土記』などの文献が残り、土地の模様もよくわかるようになった。大化の改新によって国郡の制度もとられ、中央集権国家がつけられ、古墳にかわって、仏教の伝来による寺院がつけられるようになった。

平安時代は桓武天皇の延暦十三年（七九四）京都に都を移してから、鎌倉幕府が開かれる十二世紀の終わりまでをさしている。

この時代は藤原氏が全盛をきわめ、これまで移入された大陸の文化も、しだいに日本的なものになって発達した。しかし律令政府の政治は中期から次第に衰え、九州ではほとんど命令が行きとどかず、大宰帥や国司、郡司などをはじめ、民間の有力者などは、荘園といわれる私領を広くもって、政府に租税を納めなかった。世の中は無警察に近いありさまで、各地方では争いがたえず、武士の抬頭がみられてくる。

以上がこの時代の概説であるが、前章の「地理的環境」を参照していただき、本時代の個々の事象を述べることにする。

## 二 徳富権現堂遺跡

佐賀平野は遺跡の宝庫である。最近の圃場整備事業で各所に多くの遺跡が発見されている。今後なお多くの遺跡の発掘により、さらに詳しい様子が解明されていくことであろう。ここで弥生時代の居住圏を大胆に推測すれば、現在の海拔四段の等高線よりも相当海よりまで居住していたと考えられる。しかも、弥生時代の海岸線は非常に複雑に入りこんでおり、三角洲・中洲・干潟が各所にみられ、微高地には人々の生活可能な土地があったとみられる。特に、相当大きく有明海に突出した半島や三角洲の突端付近は海や川の食料が豊富で、人々はその微高地上を南へと居住圏を拡大していったと推測される。その最大の突出した半島は千代田町詫田・直島付近から、同町用作・佐賀市蓮池町蒲田津・諸富町大堂・徳富・諸富津と南下していた。そして、その半島の最南端が寺井津付近と仮定する。千代田町には貝塚が散在している。又、詫田西分貝塚からは最近弥生人骨が百数十体発見されており、弥生時代における一大集落が存在したことを証明している。やや南へいって同町下直島貝塚からは土器・石器に混って人骨も検出されている。さらに城原川に沿って南下した同町柴尾遺跡や小森田遺跡からは甕棺墓も発見されており、弥生時代の居住圏の南進の様子がうかがえる。昭和三十五年（一九六〇）に城原川の河川改修事業に伴って、佐賀市蓮池町古賀四本松で遺跡調査が実施された。佐賀市教育委員会編『柴尾橋下流遺跡』